

相馬市飯豊地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 大豆 2 年麦 1 年のブロックローテーションを適正に実施し、適期作付け、管理の徹底により品質向上を目指す。
- 小麦立毛間播種作業の実施により播種準備、播種作業の労力削減を図る。
- 奨励品種「さとのそら」の栽培体系（栽培暦）の確立及び管内小麦生産者へ周知と普及拡大を行う。

2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【R3年作付面積】水稻:14.8ha、小麦:21.3ha、大豆:47.2ha、ブロッコリー:0.8ha
- 東日本大震災の翌年（H24年）に法人設立。相馬市の津波被災地に作付。
- R7年産小麦の作付面積は25.9ha。
- 大豆 2 年、小麦 1 年のブロックローテーションを実施（大豆→大豆→小麦）。
- 小麦は、省力化技術「立毛間播種」に取り組む。



R7年小麦ほ場（出穂期頃）

3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<品目別のブロックローテーションを実施>

- 大豆・小麦のブロックローテーション実施により、雑草の発生抑制及び連作障害の回避を図る。

<需要に応じた生産・普及拡大を実施>

- 作付けする品種は実需の動向を考慮し、新品種をいち早く導入。R5年に「きぬあずま」から「さとのそら」へ全面積で品種転換。
- R3～5年産にかけて、JA主体で「さとのそら」実証ほを設置。
JA全農、JAふくしま未来そうま地区本部、浜地域研究所、相双農林普及部で連携し、調査を実施。調査結果を踏まえた栽培暦を作成し、管内生産者への栽培指導及び普及拡大に活用。

4 取組成果

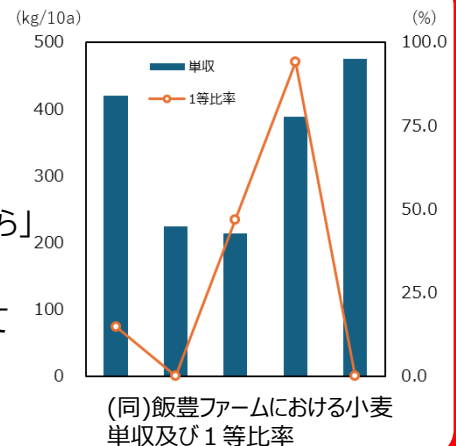
<小麦生産の高位安定化を実現>

- ブロックローテーションの実施、新品種導入により、単収を確保。

R3年 419kg/10a → R7年 475kg/10a

<小麦新品種「さとのそら」の普及拡大>

- 関係機関で連携して既存品種からの品種転換を呼びかけ、「さとのそら」面積拡大を誘導。（R7年産「さとのそら」109.9ha）
- 「さとのそら」に適した後期重点施肥や刈取り時期の判断方法について管内小麦生産者に周知し、単収を確保。
R7年産相馬地域「さとのそら」単収 374kg/10a



5 残された課題

- 令和7年度に県農業総合センターにより作成された栽培暦を活用し、相馬地域内の「さとのそら」について単収・品質の高位安定化を促進。
- 大豆・小麦を含むブロックローテーションにおける収益性の検証が必要。